



小笠原諸島森林生態系保護地域保全管理委員会委員
小笠原諸島世界自然遺産候補地科学委員会委員
NPO 法人 小笠原野生生物研究会理事長

やすい たかや
安井 隆弥

東京農工大学林学科卒
昭和53年より 小笠原高等学校教員
昭和59年 小笠原植物図譜出版
平成3年 小笠原高等学校 退職
平成6～19年 関東森林管理局自然保護管理員
平成8年 小笠原野生生物研究会設立
平成12年 NPO法人小笠原野生生物研究会設立

これからも小笠原諸島の自然を守り続けます

私は昭和53年に小笠原高等学校教員として小笠原に移住し、今年で33年目になります。元々、小笠原諸島のシダ植物など固有植物に魅力を感じていましたが、小笠原に住んでみると想像していた以上の個性豊かな植生に驚きました。そして、この自然を守り、後世に受け継いでいくことが大切だと考え、平成12年に小笠原野生生物研究会を設立し、会と共に小笠原の生態系保全活動に従事してきました。

世界自然遺産登録においても、小笠原の希少な固有種を守ることはとても重要です。私が理事長を務める小笠原野生生物研究会は、嫁島、父島をメインフィールドとして、植樹活動やノヤギ、モクマオウなどの外来種の駆除を行ってきました。この活動の成果として、嫁島ではノヤギの駆除が完了し、現在は他の地区で外来種駆除を進めています。諸島面積の8割を国有林が

占める小笠原は、世界自然遺産に登録される前から、立入等にルールが設けられており、林野庁をはじめ行政と連携をとることが大切になります。私も世界遺産候補地科学委員として外来種駆除の検討活動などに参加してきましたが、この官民一体となった保全活動の結果、多くの固有種が保護されてきました。しかし、外来種の駆除が終わったわけではありません。弟島、兄島、父島など、多くの地域でアカギやモクマオウなど生育スピードの早い外来種が増え、低木林や昆虫類、固有種の植生に大きな影響を与えるとともに、ユニークな乾性低木林が生い茂る小笠原本来の景観を悪化させる要因にもなっています。諸島全体の植生が回復するまでには、まだまだ時間がかかります。

小笠原諸島が世界自然遺産登録に至ったクライテリアの中で適応放散があります。小笠原

では1つの種が様々なDNAグループに分散し、独自の生態系を築いてきました。島全体の生態系を保つためには外来種の駆除を行うとともに植栽を続けていくことが大切ですが、DNAの攪乱という懸念もあり、なかなか進んでいない状況です。関連機関との連携をうまく保ちながら進めていければと考えています。

本年6月に小笠原諸島は世界自然遺産に登録されました。会としても個人としてもやることは以前と何も変わりません。小笠原ならではの自然を守り続け、そして固有種の豊かな植生回復を第一に考えて行動していきます。当面は瀬戸見晴台などで外来種を駆除し、乾性低木林が育つ林を取り戻していこうと考えています。